

浅草と「神谷バー」

久しぶりに本山の古本屋に行った。水田洋先生の『ある精神の軌跡』を見つけ、年末に2時間余り先生から聞いた話を思い出しながら読んだ。先生の学問遍歴とともに、生い立ちを語った「青山南町6丁目」も興味深かった。それと「東京を観光する」という特集の『東京人』90年2月号が目にとまり、100円で買った。10数年前の東京の観光を知るうえで参考になった。そのなかで「ウィークディの浅草は、夕方になると人通りが少なくなって、ポケットに手をいれながら歩く、という風情になる」とあった。

東京に行くと浅草にも立ち寄ることが多い。現在の浅草は、平日の夕方でも仲見世通りは混雑している。とりわけ外国人観光客が目立ち、グローバルな「観光都市」東京を象徴するようだ。雷門近くに明治30年創業の「神谷バー」がある。

ここの名物はブランデーにジン・ワイン・ベルモットなどを加えた「電気ブラン」であり、これを飲むために店に入ってみた。平日の昼中なのに満席に近く、常連さんらしき年寄りと合い席となった。毎日飲みにくる常連さんも多いようで、溜まり場的な雰囲気のような店ようだ。「電気」と生ビールを一緒に飲むのが「通」らしく、サラミなどの「つまみ」とともに注文した。「電気」のためか舌にピリツときたが、古き浅草を感じたひと時だった。



(2007年4月30日記)